

開卷驚奇俠客傳

第二集

式

1245
6



13
1245
6

曲亭主人編演

開卷驚奇

游俠傳

刊行去歲

與今年

請看孝義忠貞事

錦上添花維二篇

柳川重信繪畫

羣玉堂精刊



羣玉堂印

俠客傳

俠客傳第二集引

作稗史者其才不一而足矣夫才之為物猶
如有淺深也淺則易觀深者不可測故才當
為不先者屈而為知已者伸既已屈於一時
之無知己而終者伸於數百年以後之世乃
才之難易與時之用捨之舉不無異乎蓋古
古得史之作唐山家為工級然不得其法也
亦有怪怪復幻無星未足以物女子之筆統之
以勸懲一鳴之聲情態則文與時交玉焉文與情

史客傳第二集卷一

羣玉堂印

交至焉。則注意其要如自然。事物現幻者上及讀
而入佳境。耳如聽其言。目如觀其人。於是乎田
夫山妻。漁父牧豎。無不嗚咽唏噓。而不感歎。是
誠才子之書也。非帝王斯巧拙耳。甲者其書亦至
利。能苟能讀。得史者。發人所昧。及發解人所不
能解。亮有看者。先已了了。至於其尤具眼如車
輪。以看其批者。才其其稀。有看者。隨得南鍼。到
彼岸。庶矣。其非異世之知己之資耶。嗚呼。豈已
當年尚難。得况于異世。誰亦思之。 皇朝素有三

得史。是謂策子物語。竹採字通保。務語源語者。
所謂古之得史也。後人玩之不措。但注解其詞。
不作批評。豈已之難。得不知也。唐山也者。其得
史。每傳奇。其大筆。必有批評。惟則有批評。成
其的。作者之隱微。而論辨其謬者。幾稀矣。以予
觀之。美羅貫中。三國演義。高東。嘉。琵琶記。獨
聲。山。毛氏。馬。標。新。傾。異。楚。家。解。疑。評。注。大。得。題
其。山。又。於。琵琶記。復。評。中。錄。唐。恨。傳。奇。數。種。類
同。以。為。補。天。石。因。其。一。曰。汨。羅。江。屈。子。墨。魂。其

二曰博浪沙始皇中擊其曰夫子丹蕩秦雪
 恥其四曰丞相亮滅魏班其五曰鄧伯通父
 子團圓其六曰荀奉倩夫妻諧老其七曰李陵
 重歸在國其八曰昭天復入漢關其九曰南宮
 雲祥殺賀蘭其十曰宋德昭劫回趙普諸其氏
 類宜補古來人事之缺陷之今予所編次使
 傳一書正與彼意暗合前集自序云若新田
 楠木二公至忠至義以順討逆理必高誅滅足
 利氏奏恢復之功哀哉當人勝天之時策不

好百戰為畫餅古來人事大可恨者莫復其
 此每嘆有方寸之業本之于春秋心誅之文
 法而作雷恨之捍史者未之有也是予所以
 此舉自今而後看是也若不為後世則知古
 來人事之缺陷錯其恨之為一大快編
 天保壬辰仲冬之吉甲子日題于神田廟東若
 作堂之南軒山茶花開雲

葦笠漁隱



葦齋盛義書



開卷驚奇俠客傳第二集總目錄

壹卷

第十回

深林孤俠訴意衷
山莊眾僕諍舊功

第十二回

安同首喪溫泉舍
度吉淚濺節死場

第十三回

感義烈俠民斂身首
說靈夢聞人建墓表

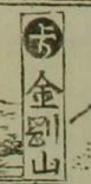
第十四回

足柄踰長總伴奸夫
吉野山小六遇女仙

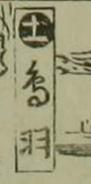
卷

第十五回

齊統遺歌助則知德逸
臙帶志歲老樹話以往



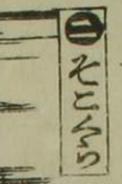
金剛山



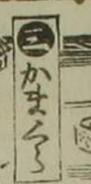
鳥羽



五柳の下



七ころり



かまろり

貳卷

參

第十六回

不毛山麓路義士憐童女
野井地藏堂俠客避驟雨

第十七回

滿泰駐駕見壯士
助則走馬捕奸黨

第十八回

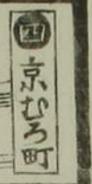
裡應外合濫法
理論方正繫枉

第十九回

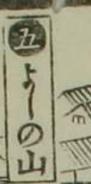
託鴻便義兒齋書信
避豺狼母女附海船

第二十回

姑摩姬夜夜禱神祇
九六媛月下譚劍俠



四京むろ町



五よりの山



六のせらり



九ヨヲ采城



八野井の地蔵



七五柳村

總目錄終 本集起應永十八年夏四月盡十九年春二月下旬但第二十回又起文中九年至應永十一年秋八月十五夜歲月有先后焉



稲城文作
守延守延のり

と柳
こけぬ
うらみち
春さむし
朝乃
無氷なひら
とらま
よと

登、稻城守延
半阿道人半阿道人

山勝山勝
杣内杣内

像寶第八

公介田公介田
与記右与記右

五
三三三三三



離德入墓南
馬跌光鼠何
識尅中生
登、北畠三位
玄同老人玄同老人

伊勢国司伊勢国司
北畠満泰北畠満泰

引板屋方引板屋方

像寶第七

依家傳曾一車

新酒霧

窮阨兩番才足免
小時了了大時佳
賢新酒霧
愚山人



木造木五介
泰勝持

像贊
第九

あつちのほまねとて人といへど
よふかひのありけり花菱笠

鈴笠の
小夜郎

長総





楠河内守
正元

いづか世を去のふともかかれ
仇と共形あ免れ下り
質楠正元 教習人

英虞將曹

後發



禪取
庶吉

勅風拔木乳猿
寒雨喪朋雁獨
凶吉去來無約束
分憂游俠似天資
質庶吉并老樹
著作堂 善作

老樹

満泰北
豊系北
島記本
満雅作
南朝記
及伊勢の
巻その中
身満泰
此の事
孰も早
也

俠客傳第二集列傳追加姓名目録

將相北白満泰 楠正勝 楠正元 上杉氏憲
 上杉憲重 二浦介時高 武士稻城守延 木造親政
 木造泰勝 英虞將曹 明星三郎 十布野左椀太
 宮尉手多天藏 足野井筒平 底倉喜我 柚本再九郎
 堂禪麻太郎 名湯回九郎 人雁鳥鬼右衛門 龍卷耳朶
 楫取度吉 隅屋維盈 僕隸山勝杣内 谷田與記右衛門
 奴隸厩介 敵介 孺豎庭鳥三女介 鈴笠小夜二郎
 農樵 底倉仁兵 底倉義右衛門 底倉礼作 底倉智六
 底倉信三 底倉里長 石畳屋甲 五柳村長
 悪棍拐兒 婦人楠姑摩姫 老樹 引板屋 長総 縫殿
 緇流遊行上人 實證寺長老 寶珠寺智正 女行者音間
 神仙葛城九六媛 通計四十七名第一集姓名目録所載二十五名共七十二名 是它有農戶供不敷焉

開卷驚奇俠客傳第二集卷之一

東都 曲亭主人編次

第十一回 深林の孤俠意哀と訴ふ

再説館小六助則の父義隆の讐敵藤白隼人安同と今宵必殺捕て義父
 著演の狂難さの只這一拳の襖をこて豫て謀り孝心義胆の智慧も武勇も
 健雄の夜敷の打拵精悍き貌姑峯投て赴ける時不應永十八年辛卯夏四
 月二十四日の黄昏時不案内多山里踰て羊腸る樹の下蔭も迷武士の
 道直に宵不寐の小篠原苔滑薄鷹は山路と登りゆく程不忽地後方人あ
 ややくや上嘯野上の小官人等せ更と喚かけり是れ小六を敬馬とて此百謀々
 氣色を厭方と信とえられ是則別人を名目藤澤多宿野の庭ゆく

那密談と竊聞せし折面善る目四郎目四郎這日の打扮の尚已時許まは
 淫流る小妻木綿の夾衣と裾短小結と柿渋ぬる三尺帯と氣海の頭小締び
 た帯の萌葱の大織絹小紺の裏脚草鞋甲脚祥も對の漆木綿黃銅種の
 圓瑞脩刀と瑞降り佩る左の小引提の菅笠と遠く撥遣捨てち
 含笑りもと接り腰と屈めて快步小六が身邊近づてる小六もと知
 るのめくもさうけさるのまれば故意ゆきぬ面色して今喚被けし和郎も款
 抑和主の何処の人をと問へ目四郎声と密めて不吉氣つるの裏あは小可の
 這頭中て客店の目四郎と喚做と頼の博徒よりの比故わりて大老
 爺小教訓せしれ兎胆と入目易ておん方人ありりの密談と凧れぬのいっや
 おん月の先途小立ちの凧る洪恩德澤も答んものもさういひの空とわられた
 おん月の落命せしる人のさひたや恙ものかの在さんとささる小と事情と詳小

告稟さるるに訝しく思されん樹蔭へ立寄ぬるをのとよ小六を一談及及も
 然いその航く先小立て小條踏のは細道へ一反のまり退の株小尻とち楓れ
 目四郎も亦跟て来つうち朝の跪の四下とええの喃小官人嚮の小可の大老
 爺の慈悲德澤の悪と洗れを明の醉の醒の善の與のと死のも辨せ
 せお身の伴小立のらんとの拵言のいの恁々の箇様々々のでのひの死のとの初安同小
 凧の野上史著演のをの陥のとの計較のそのの粹のの趣の花水橋のを著演の
 銅并のとの編みのその折の又の詰の且の世の有のがの著演の義の俠の德の恩の小の先の非のを
 悔のての柱の觸のくの死のまのせのとの又の著演の禁のめのれの小六のがの伴の立のたのりのての圓金の五の枚のを
 東の心のまのるの那日ののの密山の談の送のもの身ののの素の生の九の年の已の前の舊の里のへの假の名の川
 ありの英直の夫婦ののの密談のをの心のとのまのるの竊聞のての小六のとの脇屋の右の少將のののおんの子のまのり
 此のとの知のりのるのよのもの告の知のまのるのとの半响の許の耳の死の果のての又のいのやのるの恁の情の由の三のいのへの

大光おほひくみ只顧ひとみふらん伊勢いせの國司くにじ許落ゆる遣やりんと思食おもひ當坐あたまの
 決斷けつだん神機かみ妙算めうざん世よ憑たもく示しまきめひく義ぎとて勇いさむ心こころあわすその折せの伴ともよ
 立たて小六せうろくが旅宿りゆうしゆくの仕つかへよか去向ききうの思おもひはなれども時日ときひのいまこつとと泊とどまま宿しゆく招寄まねする
 まで汝なんぢの平塚へいづかなる宿しゆくの退ひりて便べんりりと等ちねと町寧ちやうねいの宣のたまひせし涙なみだあふまじ退ひ
 正ただしく便べん宜ぎと等ちたるふ幾程いくぢやうもそくん牙くさの狂乱きやうらんの身み夜臥房よふしやうを脱だつ出して馬うま入い河が
 一名いちめい今いま俗ぞくの早瀬はやせの投なげなせありの緯いとの顛末てんまつ色々いろいろと風声かぜこゑを毎まく隠かくれおあまむ亡なし
 骸かゝの辛くるしみありあり。涉獵せつりやくのられしやゆへに藤澤寺ふぢざいじへ葬まうの本日このひの穴あな竊せう小
 可かも柩いぶたを送おくりまわませたる胸むねの憂うれ也なり。朦もろ也なり人ひと知しるぬ歎なげれの霧きりの竹離たけり色いろを
 寓方やくはうのあまを獨立どくりつの夏野なつの芒本ぼうほん意いるあふ思おもひ難がたくあやう。萬夫ばんぶ無當むたうの勇
 士しでも病やまひ病やまひ不ふ捷せつたた脊せき力ちからある。知しや是こゝの少年せうねんの身みの病やまひ着き心こころままへへ乱らんと横よこ
 死しと歎なげけけばとと。惜あはれればとと返かへらんや。小六せうろくのこゝりも是非せひ不及かた及かたとるがら

俺進退おんしんたいさへ谷やりぬ暑あつふ藤白ふぢしろも馮ふ心こころとる密談ひそかごを果はまま。回くわい報ほうもせせ山やまより東ひがしの
 処ところろへ那人あのひと必かならず憎にくむとと思おもふ。扇あふ敷しきよのやせらばらばらんんそれさあるふ野上ののの大人おとな
 と親おやままううるる機はりと木き且かつまま又また奸計けんけいと旋まわりて大人おとなを敷しきんとせせばば俺身おんみの
 惜あはれれむむ足あしとねども大人おとなの危あや歎なげああせせるる恩おん義ぎと稟うけする甲斐かひある。所詮ところせん身みひひち
 底そこ倉くらるる那浴館あのゆかんでんの潛ひそかかりて思おもひの隨まるる藤白ふぢしろと刺殺さしころして俺死おんしるる。徳とく小こ酬うらむ恩おんの
 答こたへるる是忠節このちゆうせつの捷徑せつてい也なり。後のち々々も野上ののの大人おとなの俺身おんみと義士ぎしと思おもはれん虎こを
 死しして皮かわと留とどめ人ひとの死しと名なと送おくむ呼よぶとと肚裏はらの念ねん決けつめめ。俛見みづみの打うち扮はん。
 る日大人ひのおとなの賜たまひ。那三両そのさんりやうの金かねもて形かたちの如ごとくく準備じゆんびし。這こ鹿か路ろ立た立た躰たれれく
 暮くれ果はるる日ひと等ち程ぢやうふ思おもひひけるる死しんん身みも亦また実まこと好この身み鎧よろい甲かぶつも臙脣やうしん両りやう刀たう腰こしふ
 跨またへへ。山路やまぢの赴おもむききのこゝ。樹こゝ枝えだの間まよりよりささけけれれ評ひやうししたたののふふももああるる
 藐姑めいこ峯のねの湖水こゝろみづの頭かぶ。賽さいの河原がはらののああるる。其頭そのこゝろかよかよ冤あや冤あや狹あや狹あや狸ねこのの所ところ

為る。秋と怪と見へと去向を。下りてんは。さかして。竊は迹と跟て。歩つ背影さへ
 半面も入る。右さる。現相。方。腰より。下。も。膝。臍。さ。せ。峻。した。山路。どの。とも
 せで。急。せ。あ。歩。の。運。び。も。陽。氣。自。然。と。見。れ。て。冤。魂。変。化。は。似。さ。り。け。り。原。来。入
 水。の。陽。致。也。竊。は。父。腸。屋。殿。の。冤。家。藤。白。安。同。と。敷。果。さん。と。今。宵。這
 山路。と。投。て。潛。寄。め。あ。こ。と。と。猜。せ。か。海。鏡。の。骨。小。遇。心。地。して。漫。不。喚。け
 なる。ぬ。人。も。親。さ。欺。死。課。く。さ。存。命。て。さ。り。ま。を。智。慧。才。子。の。逞。し。け。り。然
 とも。另。不。故。あ。る。の。秋。願。ふ。の。詳。し。う。ち。明。て。示。さ。せ。め。と。繰。返。さ。舌。由。輪。る。や。小。車。の
 曳。甲。斐。え。え。一。俠。者。の。赤。心。あ。り。ぬ。優。た。る。健。氣。さ。小。六。を。連。り。ぬ。感。嘆。く。連
 微。妙。死。和。主。の。義。俠。只。一。日。の。恩。と。感。ど。て。死。と。て。大。人。の。答。ん。と。せ。れ。一。誠。の。言。又
 く。ゆ。ご。一。俺。の。比。宿。所。の。庭。中。で。大。人。と。和。主。の。密。談。を。心。と。も。く。成。稿。せ。て。その。崖
 略。と。知。り。これ。も。ぞ。漏。せ。と。今。具。不。報。知。され。ぬ。意。外。の。歎。び。現。向。上。る。任。俠。之

然。ば。那。折。闕。観。た。和。主。の。面。影。忘。れ。も。せ。と。和。主。亦。い。く。ふ。し。て。俺。と。正。可。不。認。り
 た。ほ。あ。も。不。審。一。死。と。ふ。て。こ。い。へ。目。四。郎。う。ち。微。笑。て。お。ん。疑。ひ。か。介。る。と。さ。る。小。可。可
 藤。白。の。回。諜。者。あ。る。り。比。藤。澤。る。お。ん。宿。所。の。外。さ。る。内。さ。る。張。ひ。て。萬。丈。は。心。を。屬
 たり。けれ。ば。大。人。の。ゆ。え。死。身。の。面。影。声。音。さ。お。好。知。り。あ。れ。と。の。ま。小。六。を。黙。頭。て。あ。る。が
 隠。ま。し。由。も。る。一。宣。は。和。主。の。猜。せ。如。く。親。の。仇。た。る。安。同。を。敷。手。ん。と。多。く。決。め。し。只
 是。実。父。の。與。の。さ。る。を。養。育。の。恩。年。と。思。ふ。ね。一。義。父。の。與。あ。も。亦。仇。も。唯。速。お
 禍。の。根。と。断。て。後。と。安。く。せ。ま。と。と。あ。り。の。う。ち。安。同。の。鎌。倉。管。領。の。寵。臣。あ。く
 從。類。も。亦。ヨ。入。せ。と。白。地。不。敷。捕。ら。後。難。養。父。の。う。ち。係。り。と。臍。と。喰。こ。も。及。び
 だ。げ。ん。最。も。難。義。父。の。復。讐。言。ま。れ。せ。あ。も。人。の。仇。も。俺。が。所。為。と。知。さ。で。敷。手。ん。と。尋。思。を
 あ。る。欺。く。ま。し。死。親。と。ま。る。詐。謀。り。ぬ。是。虚。誕。の。似。て。罪。深。め。死。所。行。な。れ。も。その
 詭。り。の。親。の。與。と。ま。誠。の。外。あ。る。是。則。權。謀。之。權。の。秤。の。鐘。の。如。く。重。死。を。掛。れ。ど。

必重く軽きを掛れば必軽し。人這權を用ひされば柱の膠きまで。機臨を要す。必
 必しての宜きを尋ねてかき。既の徳を掃りかへ。俺が存命であるよ。知れその
 あつと。とゞみ。小天知る地知る和郎。小三知れ。りける。便する。更便宜なりける
 欲倚伏の糾ふ纏の如し。世の塞翁の馬あるか。俺身のちり。比を。治知。りける
 俺素生。と。私主。小竊。聞せ。れ。年。歴。て。今。茲。そ。故。小。殃。危。不。慮。小。與。い。と
 る。と。ち。禳。ん。と。俺。身。先。横。死。と。示。し。と。親。疎。の。耳。目。と。隈。み。く。欺。た。り。け。る。
 亦是和主。不知。れ。け。り。奇。き。り。過。世。の。業。報。欲。鬼。神。不。測。の。有。る。夜。敷。の。れ
 伴。小。立。ん。の。要。る。和。主。の。這。里。より。京。師。の。か。ふ。卦。に。く。世。と。渡。れ。か。俺。身。の。武
 運。折。し。稱。ふ。今。宵。実。父。の。祥。月。忌。日。の。親。の。怨。と。雪。め。る。が。相。辛。ら。く。命。の。惜。ら
 ぶ。然。と。も。る。海。幸。ひ。ふ。恙。も。な。く。俺。も。亦。京。路。投。て。立。退。く。べ。い。あ。く。と。ん。小。那。首
 中。環。會。小。目。の。ま。ら。ぎ。や。の。口。け。う。の。好。意。あ。小。六。が。死。で。有。け。る。よ。と。親。弟。兄

中。世。の。人。中。も。報。る。と。ま。く。過。さ。れる。が。い。と。く。義。士。と。あ。る。ん。今。あ。く。憑。む。は。只。これ。の。こ
 ろ。と。な。り。と。あ。る。と。口。説。く。と。目。四。郎。の。ま。ま。と。亦。本。意。を。承。り。ま。す。い。ふ
 去。て。美。引。く。死。好。ま。で。も。え。の。か。大。老。爺。小。折。言。ひ。折。今。宵。あ。ん。身。の。夜。敷。の。伴。小
 立。ん。の。ひ。と。い。は。れ。と。ん。身。と。落。遣。る。折。小。俱。と。旅。宿。に。任。よ。と。と。准。備。金。三
 賜。下。小。の。の。空。の。り。か。恩。義。と。復。を。術。さ。ふ。大。人。の。仇。を。那。人。を。敷。と。と
 以。決。め。今。獨。も。這。山。路。中。料。ら。ご。ん。身。不。遇。さ。今。宵。の。伴。小。立。ま。も。あ。ら。ば
 大。人。小。期。した。る。誓。言。も。今。又。あ。ん。身。子。稟。せ。よ。と。皆。搦。鬼。さ。る。ん。と。且。小。可。を
 那。首。ま。で。俱。と。あ。れ。ぬ。必。二。椿。の。不。便。あ。り。その。毛。を。あ。い。ぬ。と。い。ふ。小。六。を。眉。を
 頻。卑。め。て。不。便。と。い。ふ。甚。麻。る。故。と。向。へ。目。四。郎。の。れ。が。と。よ。小。可。の。那。浴。館。内。を
 よ。く。知。り。そ。と。御。導。せ。し。れ。ば。是。不。便。の。一。つ。又。案。内。者。と。い。ふ。武。運。小。稱
 ぶ。と。以。の。隨。小。宛。家。と。敷。を。捕。り。あ。る。と。那。人。の。後。類。ま。ら。其。由。小。去。ぬ。と。い。ふ。ん

火と鑽つ程の目四郎も亦腰を探りて三尺帯の間より、枝を引出ま蠟燭の準備を
 小六も答へて火を移され目四郎は左より小篠を折採て蠟燭を挿地上に
 植て却平坦なる石の上の件の画圖を推用せ小六も跪居て彼此とる目四郎
 指さし示あり是亦浴館の大小総て十餘間あり奥よりなる東の間の藤白
 主の臥房は這次の間近習の侍者西三名宿直となり西なる五間の奥方
 と給事の婢子們并両舎三屋の歌妓們が紅粉金あり又便室ありとけ小奥
 方の氣賀の館へ歸館せしめて歌妓們も皆身の暇を賜たつて這頭へ入影いさ
 へべし又小玄関の南に在り北なる子舎の若黨處の南溜は鄰るの雜色子舎
 中間子舎の下あり浴室は即乾の方と坪も寛二不所あり其庭あり庭あり
 這里より奥の出口あり集れ庭より入りて出居の這方を断截らば袋は東西を
 探るが如く主従一個も漏れまらざるその期及び小可の奥と面亭の間の這個

杉戸と目柴のしと走入りの逃出の奴們ありと敷を曲てん身は奥より入りて宛
 家と敷を捕あか、佐做まとい幾人ありとも逃まていひの毛とる小取る如く耳は示
 せ小六も相々點頭て俺も如右こそ思ふれ臨機応変時宜不依るのありあれど
 進退は今より茲に定めたる這画圖の現價千金目足は優る封助は誘ひ
 べしと身と起せば目四郎は速く画圖を眞實とて懐へ夾る程山風吹れて滅る
 蠟燭とらち垂れて俱れたらうとけ入る山の谷河は壘堰く水の滔々と音凄ト
 夏樹立其貌姑峯楊檀の花零果て鳥夜と照さん雪もある芝種の節の比る
 と降りと降らざみ私雨の雲存んとて又日雲る峰林麓軟杜鵑俺踰ゆけど
 伊豆の海や澳の小嶋は見えども有敷茶は深生生の恩仰けは高は親の親も
 返を剣大刀身と捨てて武夫の名も揚羽の蝶鳥とて伊豆の藤原の曾我は
 灵堂の這山本ありとすけげ肝向ふ心祈る健雄の先より、闇は夜の其



首とも見えぬ目四郎ハ熟れ路々水茎のふも迷ふ急ぎ随小草鞋のきまき
 壊の入る底倉の館小着はけり。這時夜ハ女子二刻時候ゆく。萬籟声はく
 寂實たる折とよけれと目四郎ハ安同ガ浴館多。庭門ハ身と倚せて。胡不半
 响許荒然と夕天々退來て小六を喚かけ其くや。奥中人声幽の夢也然ども
 這頭ハ人影あはせ小可ハ先潜入てる。不由谷子と覗知るべ。弓の弦も断垂て
 庭門を開く。戦飯の準備もあり宜く腹と繕て姑且等せぬひひと。ひん軀て
 懐より紙小裏ミ。焼餅と四五枚合ふ。その内三枚と又紙小裏ミ。小六ハ通
 與まわせ小六ハや。受合てある慚愧。儘まで行届くれ。準備ハ妙ハ。及
 ぬと。只小心と目とと。と。暗號とせ。か。と。其。程ハ目四郎ハ餅一枚。城ち
 啖ひ張る。口ハ。嗚り。け。が。ら。と。板。屏。の。も。抵。り。閃。り。と。衆。り。樹。枝。ハ。竹。か。て。庭。下
 立け。ハ。介。程。ハ。藤。白。隼。人。正。安。同。ハ。嚮。湯。治。の。暇。と。賜。り。鎌。倉。と。立。出。り。這

底倉も米邑るれば石見屋と喚做した。第一番の浴家と懃て主人并小妻子
 も奴婢も皆別宅に移らして。後類の外出入を元さ。夜中も酒宴持。其。中。一
 俣踏らして。已。憚。る。と。さ。り。か。ども。這。里。ハ。奥。ま。り。る。山。里。る。れ。ハ。鄰。の。遠。く。外。相
 早。然。も。も。領。主。の。勢。ハ。怕。ま。さ。る。の。あ。り。ま。け。れ。ハ。湯。治。の。為。ハ。旅。客。の。来
 る。も。よ。し。と。傳。て。他。所。の。温。泉。ハ。浴。る。の。め。ま。り。ハ。恁。れ。ハ。當。日。底。倉。ハ。浴。家。ハ。総。て
 生活の便着と喪い。け。れ。も。ち。咳。くの。愁。心。許。ハ。由。り。限。ハ。あ。り。目。と。俣。て。快
 直。か。と。不。樂。ハ。け。り。故。あ。る。か。安。同。ガ。氣。賀。あ。久。く。と。と。と。と。と。底。倉。ハ。浴。館。ハ
 逗留の程。驕奢と極めて。富貴と里人ハ示さ。是。小。人。の。傲慢。ゆ。て。豫。て。心。も。小
 々。ハ。字。生。来。武。運。ハ。稱。か。九。介。年。已。前。脇。屋。少。将。義。隆。を。敷。捕。り。と。あり。
 俺身。猛。可。ハ。發。迹。て。底。倉。の。莊。と。加。増。一。賜。り。鎌。倉。殿。ハ。昵。近。と。主。君。二。代。の
 寵。臣。ハ。做。も。登。り。て。今。ハ。至。れ。り。便。是。底。倉。ハ。俺。立。身。の。吉。地。る。れ。ハ。休。暇。ハ。折。を

え。か。こ。の。か。ひ。の。あ。つ。り。あ。つ。て。こ。の。よ。ろ。こ。つ。つ。と。尋。思。ひ。た。る。と。し。あ。れ。は。そ。れ。宿。念。を
ゆ。六。那。首。小。赴。死。醜。遊。び。て。這。飲。び。と。盡。さん。と。尋。思。ひ。た。る。と。し。あ。れ。は。そ。れ。宿。念。を
果。せ。し。然。ら。ば。そ。の。あ。れ。石。見。宜。屋。の。見。義。小。脇。屋。義。隆。王。の。湯。治。の。為。小。寄。宿。と。敷。き。ま。し。め
あ。つ。り。浴。家。へ。第。一。番。の。大。厦。中。坐。席。の。間。敷。寡。々。ね。安。同。の。身。取。先。功。後。栄。共。の。愛。を。還。留。の。程。那。里。と。て。俺。浴。館。ま。と。ら。れ。と。妻。子。眷。属。相。推。す。て
い。ぬ。比。よ。り。這。果。外。の。既。し。と。五。十。日。の。期。限。も。才。小。の。け。り。け。り。の。小。這。年。来。死。心。の。野。上。史
著。演。を。陥。る。密。策。を。授。け。て。放。遣。し。る。小。賊。目。四。郎。が。信。い。ま。す。と。ま。ぬ。を。絆。露
ま。て。敷。き。れ。い。せ。ま。然。ら。ば。今。の。便。宜。の。あ。つ。り。空。ふ。く。を。放。逃。さ。る。飲。花。開。く。山。の。雲。を
り。で。心。小。か。ら。ぬ。日。も。る。け。れ。も。俺。鎌。倉。へ。還。り。傳。の。虚。実。と。探。る。と。易。く。は。五。十。日。の
定。限。も。未。だ。四。日。あ。る。と。これ。の。妻。子。と。氣。賀。退。り。と。俺。も。明。日。後。日。の。比。鎌。倉。へ。か。へ
ま。ま。あ。る。べ。い。然。ら。ば。歸。府。の。准。備。と。て。妻。房。の。長。総。の。婢。子。們。と。老。黨。と。若。黨。と。こ
分。ち。冊。け。て。這。日。氣。賀。返。し。遣。し。又。遊。真。の。與。あ。つ。て。來。ぬ。舞。妓。歌。妓。們。の。身。の

暇。取。り。今。宵。若。黨。七。名。と。雜。色。奴。隸。十。四。五。名。主。僕。合。し。と。二。十。餘。名。の。不
底。倉。小。残。り。たり。抑。件。の。若。黨。小。底。倉。記。我。八。袖。本。再。九。郎。と。喚。做。ま。し。二。名。藤。白
誑。第。の。家。隸。と。て。這。宅。名。湯。面。九。郎。十。布。野。左。枕。太。宮。尉。才。田。藏。堂。榎。麻
太。郎。足。野。井。前。平。平。と。喚。れた。五。名。の。見。義。小。女。同。夜。敷。と。て。義。隆。朝。臣。を
害。せ。し。折。之。の。催。促。小。後。で。俱。小。找。し。野。武。士。之。才。小。中。口。才。の。武。士。執。云。も。拙
か。り。り。け。れ。が。遺。迹。一。折。召。上。せ。て。馳。て。近。習。小。才。の。才。小。又。安。同。の。婦。女。輩。と。皆。退
か。て。猛。可。小。寂。し。く。な。り。た。る。小。才。の。九。个。年。前。義。隆。と。敷。捕。ま。す。の。月。の。の
日。の。環。り。末。で。四。月。廿。四。日。小。才。の。當。所。の。名。残。も。今。宵。の。這。那。の。毒。死。小。今。宵。も
亦。酒。醜。と。遊。ぶ。あ。つ。り。食。う。ち。聚。合。て。祝。せ。と。那。七。名。の。若。黨。と。身。邊。近。く
召。上。せ。り。平。生。の。面。前。へ。出。ま。さ。せ。ける。庖。丁。人。雜。色。們。を。席。末。小。侍。り。と。酒。宴。小。自。殘
催。した。る。折。り。最。愛。の。龍。陽。へ。け。庭。會。三。女。小。と。美。少。年。小。細。腰。鼓。と。拍。せ

るどくと主僕快樂は餘念もろろ。そが中記我八と再九郎の家子態く同僚の
席と譲らば女同が與ま不也。會釈もろく受戴してうち累あつて嘆む為体は傷
痛いと思ひ。左腕太田藏面九郎麻太郎女用平伯の目と注し俱不安同にうち
對ひて今の世の曲子も酒の思ひ出まといへ相合ふれぬ。飲量も當所の戦い
數も足らぬ敵もろろ。那大刀風が研立られて抜む躬方はろろ。俺們五名先は鬼で
船田小二郎隆友と敷み捕さる。其の某のたのひつてえろ左腕太の發語も取接ぐ面
九郎起身脇の膝と抜めて然之那折堀口五郎が深癩も屈せぬ死物狂ひ。雜
兵許も敷みれかとも某烈く戦ふ。鎗めて矢庭も突付せと感せぬ。ぬのろり
たといへ麻太郎鼻春蝨めろ。然之大将義隆の防箭と射盡して退れて腹と
めされ坐席と今思へ。這次の回であのけん。後お主人が造更て家の初の如くろ
ねとかわらぬ武勇の俺們五名就中義隆の首とぬろりの鳥許かまろくも某

當時これを功名の第一番とろり。誇れ點頭く宮尉半田藏然之田
子勇は二の敷みれ。迹立替りて首級と揚し。和殿の造化も剛なり。鳥山七
郎江田藏人ろりけれども其も漏さぬ。敷み果せぬ。此侍る同僚。足野井。と某がぬ
柄と世の誼第よ家子よと。大平の日のみろろ。允と人もろり。上坐とぬろり。
却戰場も臨みて。皆新参と看ふ。恥と思ふ。ぬのろり。相合ふれぬ。思ふもろり。
と過わ。ぬのろり。出で空君めろろ。再九郎記我八も俱お怖と。怖難る声高
ろ。ぬのろり。ぬのろり。以而非廣言と真実とぬろり。那折の俺們も。馬前を拵
ぬ。武勇と相合し。知食とけり。向ふ前を大刀風。高柳兵庫の當
るぬのろり。俺們兩個相敷ふ。首と捕り。船田鳥山江田堀口
勇士といへ。深癩も堪ぬ。泥も吐く。舞は似て。或の自害。刺違へる。死首と捕り。
ぬ。されと人の知とぬ。以て歎嗚呼る。と。言回せ。俱は性起つ。生醉同士の眼と

睜り膝推向ういと買一罵る程小事いであらへんええを安同やと推鎮めく。
 若們いそ酔るる俺のよとぞねか主の與身もええと敵不當る武夫役。
 その一日の故もて耕さる飽まると味も飯も新舊ありとも忠義も新兵古。
 兵もろ捷も敗るも大将の軍配に依るのめれが當時躬方の功名は皆安同。
 致を所誇ら俺と誇りもせめ天飛ぶ鷹鳥の地もまると狗も朋輩あるの強。
 益の口論不敬あめとや向後と佐と慎みねといれて大家青松の塩の形を。
 改め額もつれて仰うけらなりぬ御免のうの酒與荒れど憶は口馬齒莧箸。
 中の棒も掛らる尊と酒菜も今一度過さる有がさるん重々過念照文の。
 酔て件の如くさけるを礼と允さるひてよと異口同音の陪話一安同呵々ち。
 笑ひて然も亦復醒さん若們も回背酒量も竭と喫ぬか過一軍の剛膽は。
 左もれ右もれ捨措が死那著演奴さるか。這里おゆるは皆腹心と逆の機。

密に知らぬもさければ今ゆ隠美くもあはれぬ比の派見奴の殺さる一頭顱と接。
 去て金さへ取せて遣せしふふふあけん若們のさるるもさるる一彼と向へ大家さんい。
 現那もひひた入るさるる才あけを諾ひ稟せ一大事と做らるとも做らざとも。
 けまも便りのさるる仇も知れて殺され彼備考るる心変りて逃亡したる知るべし。
 らも探知もくも人も浮世の疎は這山里の兒僑居で便る。この安同領てその。
 笑もゆれば鎌倉帰心今ゆ矢のぞ既も準備とさるる明日の必も氣賀へ還りて。
 後日帰府の赴ん靴も腐て癢と搔く備中斐々盗見お吊られてのめと思はんも。
 俺鎌倉へ還りる若者演奴と結果る計畧の裁もあらん今宵の浴室の名残ん。
 且喫むべしと引受て酌しては竭を不盡と一人別取まれば然でも找む社伎們酒の。
 人當千の敵と擇まぬ乱盃雜盃泥の如く酔ぬもろ席の中堪えええと安。
 同の卒就寝んとも鈴釘さる身も起せぬ浮踏やと三女介がと掖は扶けく。

そが伏見臥房に冊を入るはけり。現常言いふまゝの。豪家の門は瘦たは狗をく。
 農夫の廩も肥る鶏あり。安同使も奴隷も怨ある才蘆さけ。酒を竊る餽を
 隠して。白濁の穴引く如く。飲食いざとあめりければ。主より先小酔臥して呼べども
 起ま鎖まき。忘れし門衝く反吐の声。心裡悲しく。ゆきも還り。階下。基所水火
 既済の數盡す。今宵敷る命との知。ぞを算と乱した。轉寐言と轉は
 牙と。鼾睡の声のそ高かけり。介程小館小六。浴館の庭門。壁を漆し身を潜
 め。目四郎が出て来ると。今夕と等程の結陰。る天雲存て。二十四日の月鮮明小
 頭れ出ると。瞻仰れ。丑三時候ある。けり。等と久かりければ。獨連の焦燥る程。
 内より。庭門を開いて。潜り出る。あは。是則目四郎小六を。宴時透相。首尾の
 什麼と。回程。目四郎声を。密ま。七さ。等不。平て。い。け。那。里。の。酒。宴。の。最。中。の。く。
 時。を。け。れ。出。て。も。来。ず。臆。て。奥。ま。を。潜。入。く。現。小。六。の。甲。夜。中。も。知。せ。画。せ。し。如。く。

婦女輩の氣賀の邸。皆かまされん。一個も。と。奥。主。後。十。名。の。ま。り。今。宵。八。餘
 波の酒。醺。と。雑。色。奴。隷。を。至。り。ま。を。醉。ぬ。り。の。い。り。ぬ。丸。年。己。前。這。浴。家。あ。く。
 脇。屋。殿。主。後。と。敷。捕。た。り。功。名。話。説。子。角。口。あ。る。も。の。藤。白。亦。野。上。の。大。人。の。
 へ。徳。々。と。の。い。出。く。憎。さ。げ。小。可。の。噂。せ。れ。て。生。憎。く。嘔。ん。と。せ。鼻。を。擡。て。出。さ。
 ぶ。と。せ。折。の。涙。こ。ぼ。れ。て。困。た。り。徳。而。只。今。夜。務。の。退。て。主。後。俱。小。酔。臥。る。睡。
 端。を。い。上。下。二。十。餘。名。あ。れ。も。要。駁。の。折。あ。る。あ。の。の。七。八。名。小。過。ぐ。と。徐。入。
 り。せ。の。い。と。辞。せ。う。く。其。に。報。る。と。う。ち。听。く。小。六。を。齒。と。切。り。原。来。這。浴。館。に。
 是。先。考。主。後。の。敷。れ。あ。り。故。迹。を。り。款。處。由。易。む。今。宵。の。祥。月。忌。辰。の。
 怨。と。復。す。武。門。の。眞。加。折。あ。る。追。薦。これ。小。優。め。る。一。寛。家。の。動。靜。人。數。
 ま。で。任。詳。小。少。知。る。目。四。郎。和。主。の。賜。る。非。除。衆。人。看。簞。と。も。一。念。疑。て。い。
 石。小。立。ら。位。前。あ。る。の。を。漏。え。快。々。馮。む。案。内。を。せ。よ。と。喘。休。を。目。四。郎。推。

鎮めく酔臥たりとも冤家の多人數徐に束ませと耳流ら心と屬て先ま
樹の下周庭の松も昔と偲ぶ友ありて是れは是之懷舊も堪ぬ小六を敷
柄の刀の鞘釘紙潤しとや捧と甘ばと一歩と千歩とを杖とけは

第十二回 安同首と温泉舎小喪ふ 庶吉涙と死節場小賊

却説客店目四郎の小六が潜入する折先庭門の戸と引よせて戸尻の拮埒櫃と
下しけりあち逃歩のあらん折快は用心あると小六を猜しと既小名縁
類近く杖と目四郎の遠く袂と掖さ指さして這坐席より一房隔く
奥の主の臥房に豫謀合せと小可の奥と面亭の方ふを赴くべけれ好ま
ぬと其は小六を听々點頭て俱に縁類よりうち登る小戸の一枚外へく
あり躬く其頭より杖入る幾程も安同の臥簟の頭は近づつてとこれはその

次の間近羽の侍者西三名皆酔臥て枕もせを足を伸しと用事大の字小
似方もあり一個の一個の腹と枕小丁の字は似方もありと小六を這り自由か
ぞ漏亮の透間より且安同と覗ふ山里まれば蟬のあなねや青紗方亦出蚊帳と
無れ終と圓行燈の朧月光幽る浦園の上本綾の小横と打被たる安同の三女介
と枕と並て臥すけ小六をこれを見て此も擬議せぬ漏亮と敦刺里と用て
入る程小三女介の折もものまじ熟睡とせりけん忽地頭と拾げて小六を
はく敬馬にぐる連り小主と揺覚して賊あり賊ありと喚りて三声とも立させ
小六を枕方踏鳴りて藤白安同快起よ九十年已前今日汝を敷く
あひる脇屋陸奥少将義隆朝臣の奉為は怨と雪る俺は是源助則之豈強
人の類あるんや快々勝負と決せよと名告掛喚りる声小安同駭覚てあ
るちと枕方る刀と合せて身と起し是りと引抜く程もあせ小六を谷茂

落せる獅子の虎彪こひょう此こ駈うる如ごとく礮げと敷うる刃やいばの光ひかり安やす同どうも亦また眼まなこを閃ひら
 了りと錯さくせど脱だつれぬ命いのち運うん寛かんの聊さう狂きやうひかども勇士ゆうしの刃やいば尖とが行いたまふ女に同どうが右みぎ腕うでを
 ちを先まへと破やぶ落おちしと餘あまる刃やいばを身み邊へるま女に介けさへ肩かた尖とがより乳ちちの下したまでを
 斫きられし主ぬし後ご給たまは深ふか痰たんの堪たむま這こ那の一いつ度たび小こ苦くと叫こゑびて俱ともに撞ぶとを仆ふれけ。
 浩こう処こは次つぎの間まに醉すい臥ふちけ近きん習じゆの侍しやく者しやく底そこ倉くら記き我が八はち堂どう榎えん麻ま太た郎らう十じゆ布ふ野の
 左さ腕ぜん太た這だ們らの三さん名なが物もの响ひびか方かた僅わずか夢ゆめ覺あて仇あだ入りぬと思おもふを駈かるか中なか刀やいばを
 ちあふ合あひ合あひて入いらんとと小こ六ろくを是こゝでこゝて冤うん家かの首くび級ぐいと捕とらるま遺いるま物もの々々一いつ登のぼ
 と血ち刀やいばとを真まこと額がくを振あり抗かて跳と菟うらら稠しうる敵てきと敷うる麻あし非ひけ趕お退とけ走はるま出いで
 次つぎの間まで先まへに立たたる麻あし太た郎らうと韓かん竹ちく割わり斫き仆ふれ尖とがに修しゆ煉れんの大おほ刀やいば風かぜ来き找たづ難なる
 左さ腕ぜん太た記き我が八はち逃にげるとも脱だつさと思おもひしけれ前後ぜんごより引ひ夾くわを敷うるとと小こ六ろくを
 引ひ受うて左さ右みぎの當あたる奮ふん闘とう突つ戰せん妻さい時ときををあれ左さ腕ぜん太たの刃やいばと礮げと打うち落おちしと

怯おそむと透すき下したと破やぶる拳こぶしの牙きば左さ腕ぜん太たの頭かぶ顛てんの遙とほく滾ま滾ま落おちて血ち煙えん立たてて仆ふれ
 既すに記き我が八はち眉まゆ間ま痛いた痛いたと肩かたひひ連つりま声こゑとゆゆり立たて人ひと々々起おきま癖くせ者ものあり
 癖くせ者もの入いらぬと喚わん立たる声こゑ小こ駈うる宮みや尉ゑい斗と田でん藏ざう踏ふみ足あし野の井い井い平へいを醒さぬ宿しゆく
 酒さけ小こ頭かぶ顛てんの重おもく兵へい兵へいく片かた膝ひざ推お立たて目めと磨こる袖そで本もと再また九く郎らうと俱とも小こ名な湯ゆの面おもて
 九く郎らうも刀やいばよ鎗やりよと罵ののりて薄うす間ま室むろと撈さらるまあり或あるは准じゆん備びの角かく弓きうとと小こ六ろくを
 覚さも皆みな弦しゆん断たれて亦また弓きう引ひれと空そら下した簞さん前まへの敷しき漏もれれのれ雑ざつ色しき奴に隷れいと喚わ
 覚さしと又また勢せいを憑たむ破やぶ軍ぐんの劍けん戟げき左さより手て燭しゆくと兼ともさとあと成な彼か此こより起おき
 来きり競きふと稠しうる程ほどもあれ小こ六ろくを既すに記き我が八はちををめめび撞ぶと破やぶ仆ふれと敵てきを擇えら
 ちぬ若わか武者むしやの鋭えい刃やいば尖とがの向むかふま前まへみみ那の牛うし孺にの美み濃のう路ろの防ぼう戰せん又また時とき致いたしと
 般はん斫せきも是こゝは優ゆうとと名なをを大おほ架か濃のう梨り子し割わり腰こし車くるま引ひんと走はるま後あと麻あ跡あと
 より推おまと真まこと額がくと敷うられて仆ふる俱とも嘯せうと真まこと愛あい観くわんのの本もと意いるま鮮あ血ちを

紅蓮の花獨樂と袖本さ九の置土産宮尉才附て尋田藏經の功德不疎く貪
 錢筒平の足野井の足と破れて一足飛ぶ十方億土死生の旅羽立ち共
 祀られぬ鬼の面九も臭う。名湯の因果廻り来て死は温泉の焦熱地獄を
 面前に観る乱世の人の心は悍るが這折雑色奴隸まで各宿酒の醒せし
 匹夫の勇と好むりのみづろろ力を料や勅念もふ値るの皆共侶小敷されけり
 任れば王僕十五六名一個の小六砍立られて血の流るる一為体と看官に訝り
 相應かろとあふあふん。あれども戦ひの勝負人の言少より吉余臨きて死を
 極め敵と怕れざるのの單身小十數人ふ當るといへども不利あり。這藤白
 黨の躬方の言勢と瀟々の。主の與ふ命と惜まて先と駈んとあふのる。加ふ
 酩酊ま。臥て幾程もあふけり。醉眼るれば甲も乙も敵の言少と認むて。同士
 較むとさへあふり。かたを争く痛むと肩あふの言る然る小六が勇敢武藝の千万

人小雋問れ。孝義小死とたもあふて。鋭氣日屬十倍ある。大刀風向ふれ誰
 一人も免る。命運時あり。神明仏陀の冥助あり。とあふ。本意遂げ死難言る
 ま。這折茲小敷と盡つ。較も果せし宜るま。間話休煩。小六を豫以ひ
 隨ふ。居るの仇を敷捕て姑且息と吻せり。三月の末敵のやあると四下小
 眼と配まども寂寥多くと音もせられ。反る大刀と柱小當て推直一血と拭く
 鞆を収め。安同の臥房へゆ。ひ赴て。相れ龍陽の少年の初大刀の深痰小息
 絶て血は塗れ。俯さる安同のま。死るも剛才亦小六が找あぬ。楚响の耳あや
 入りけ。やうやう頭と拾け。起んとまれ。腰立ち。噫。朽惜や。と春虫動くを小
 六を争く走り。撒り。項と抓。引させ。席薦小鼻と捐着る。怒る声
 鳴り立ち。やれ安同。必知るや。汝の素より脇脇殿。結び。怨のありと。ゆえを
 且職分あり。ゆは。不意に起りて較まる。是足利家の與る。栄利を

料る小人の忠義めき、所行きども必の鎌倉の管領小原衣賞せられて發
 迹より民の膏腴と絞して飽きて驕奢と極め賢と媚して野上の公相と害せ
 んと計較たる老奸積悪天の憎は通り一応報行心と今助則がもかかて脇腹
 殿の冤魂を慰めたるをうへ民の蠱毒を拂いて世の為亦人の與心と快く
 なまの天然の右少將の記念を。這短刀の刑戮のまど下さん覚期とせよと
 必の隨ふ馬責て見りと引抜く菊一文字の短刀右の合を直せば吐嗟と四極
 く安同を操返し仰反らして胸前鬘煞と刺徹して軀と首級とを捕さける。
 憊而小六を血の溜り刃とを拭ひ收めり。彼此とええら。安同の枕方鼻紙
 其のあける是究竟と引きてそれ紙わり香盆あり下壇の料紙硯あり
 けると皆合を卸して冤家の首級とち載せて西に推向け身と退かして合堂
 たる念まるや。先考尊ヨ火并は五家臣船田鳥山江田堀口高柳們も火あ

ら。今助則が眞祭れる冤家藤白安同の首級と御食く在り世の怨と永存あり
 ねか。報恩謝徳頓生菩提弥陀佛みご仏と唱れば然も勇み一健雄の心れ
 猿腸と影をらるる悲しみの亦あるまらりし却あるあふれば硯硯とせり
 墨磨流し筆と漆て身と起り備る。雲母摺の重紙戸小性心永十年。今月今
 日於此浴館被撃比之。奉為腸屋右少將誅戮藤白隼人正安同主僕十數
 人者源助則と墨黒伊の大書きて憶む荒然とち笑ふ。忽地心小とや。はあ
 めも目四郎のふあうん今までも影ふあふぬいと誣。愁小面亭のさ立別
 れより敵小當り。瘡と肩ふる飲敷もれいせま心とる。甚そやと獨語く遠
 く。圓行燈の頭も白金の燭と兼抗植る蠟燭は火と根として出で彼此と尋ふ
 面亭のさ小敷もれい尸骸二四個横りて鮮血も躑と流る。目四郎と這
 里のもさの次の間の板席も。庵溜の通路のやあう入其首小措れ鐵行

燈の頭も人ありて。嘯く声のまてければ小六の胸安く。是は先後小心あつて走ると其首小到りて。是則目四郎也。既痛癢と肩ふるるにけり。登時小六を声とわけて。よ。目四郎癢と肩ふるに安同と成事とて。十五名敷を捕らる。奥の仇のわらひ多かり。不佞の浅癢も肩小被て立退く。快々立ねと尉れば目四郎頭もち掉て。喃小官人秋秋。宿意は錯の居身の仇を成敷も果一玉ひとる。それふ所け。今生ふ念送まのも。死命を死身。救ふ何処ぞ。立退く。小可の向の程逆謀合せ。如く。這里より奥へも。多かる。雑色奴隷と敷も留て。俱小志と果まの。中。大刀筋の捷。るもあければ。憶も膝頭を破られ。恁の癢も肩ぬ。辛くて件敵。皆川拂て。死身の奥。後安く。され。も。這。深癢といひ。腹と研んと。刀も合も直せ。が。い。身。安否。と。知。今。下。対面。本意。遂。の。趣。と。听。て。死。ん。る。早。かり。と。思。い。入。り。て。ひ。を。報。る。を。

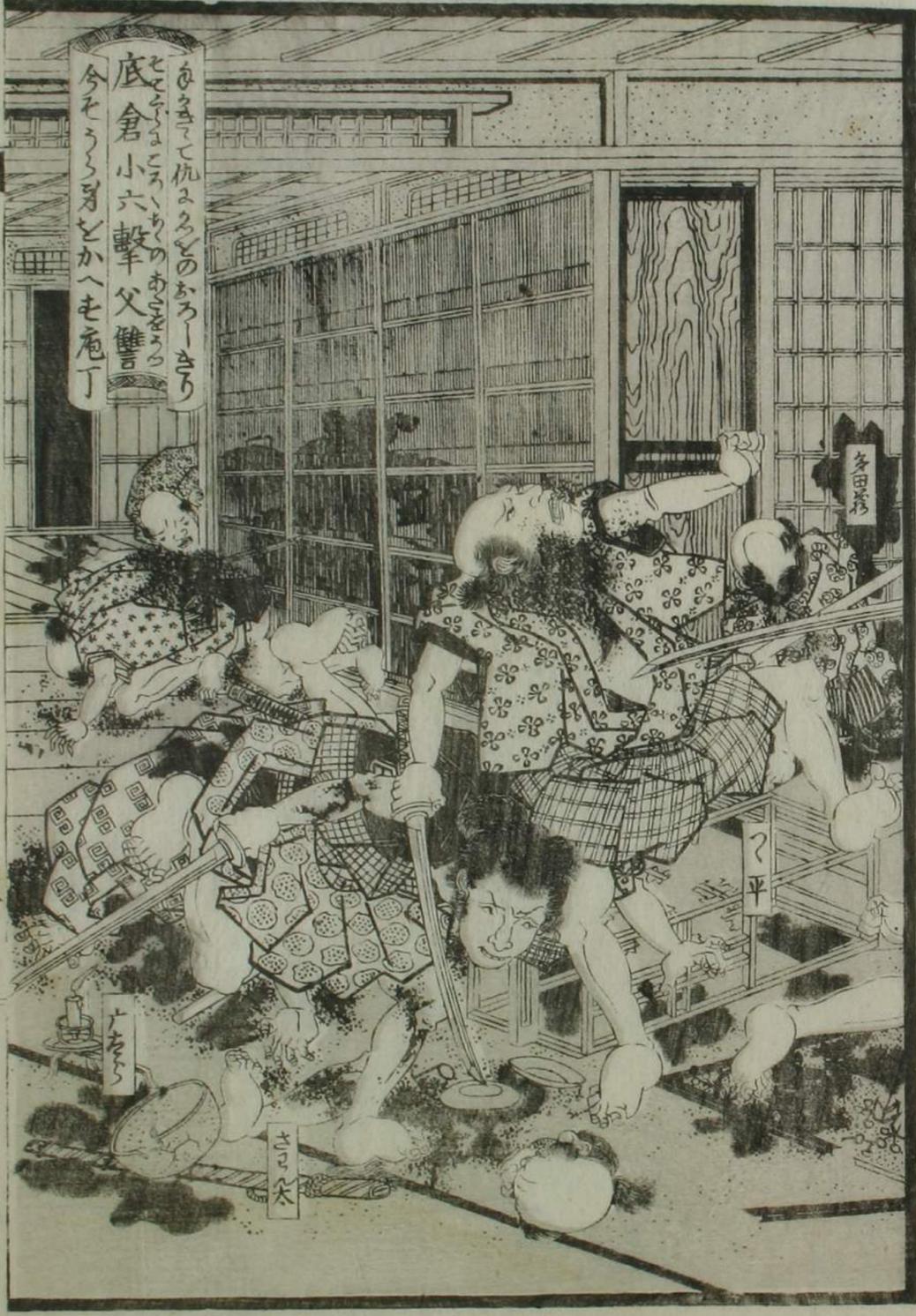
小六と。安。あ。む。目四郎。今。心。弱。た。と。ま。ひ。七。數。十。所。癢。と。肩。も。也。躬。所。を。深く。傷。られ。本。復。せ。の。世。ま。り。況。和。主。浅。癢。の。非。除。定。業。限。の。あり。と。も。俺。恁。仇。と。敷。も。果。せ。の。ま。く。和。主。の。助。助。も。依。り。死。身。と。も。活。る。と。も。共。侶。と。も。思。ひ。の。の。相。垂。と。獨。立。退。ん。や。要。る。と。と。い。ん。ら。快。々。肩。小。被。り。ぬ。と。ら。ひ。と。躬。と。も。合。も。目四郎。聽。振。拂。ひ。て。御。好。意。の。有。か。死。身。を。最。慚。愧。く。も。り。と。も。死。身。の。と。も。扭。足。枷。も。り。路。次。の。障。り。あり。さ。で。跡。も。り。追。隊。蒐。り。て。後。度。の。難。免。及。ぶ。が。然。れ。只。這。身。獨。り。と。死。身。も。俱。小。危。か。る。後。悔。其。首。小。立。り。情。物。を。案。考。左。も。右。も。小。可。の。存。命。が。死。情。由。さ。へ。あり。と。ら。小。六。も。眉。も。ち。頻。算。め。て。死。の。易。く。考。生。の。難。く。死。の。癢。も。氣。を。屈。し。七。秋。何。ぞ。の。情。由。の。あ。る。べ。し。と。い。ひ。頭。と。入。り。ち。掉。り。て。尉。め。る。目。頭。肩。の。沙。汰。の。ま。り。と。思。ひ。ぬ。か。初。小。可。這。浴。館。偷。盜。の。與。小。潛。入。り。小。藤。白。玉。小。捕。ら。れ。と。放。遣。され。つ。刺。金。十。兩。を。惠。れ。は。是。那。主。氏。

慈悲ありて野上の大人を害ま死與われど這身取てその恩あるとまをくさむ。
 徳て介後野上の大人の徳澤義侠の濁と祛て清お就けり俺身は幸い藤白ま
 不幸なれども善悪邪正の差なれば他が約お背れど世の人罪とせあるべし然らん
 列の旅宿お仕へて大人お稟する恩徳お答んぬをこととする的の外もあん身の人水お
 事皆画餅おるものか大人も危く俺身も亦措所なつて山も海も就
 死命を捨て那人を殺して俱死せんと必折る料らども死身お環の命目より夜
 撃の案内お立たるは本来の面目を論お及ぶとわが今より後の命を惜て
 あん身と共お立退くは真の俠者おあらんか。そこのふどこのまて藤白ま奸悪
 世の人通て知らぬもろり。民の與ら虎狼なれども俺身の素より怨もあべ撃られん
 頭顱と接されて養られけり那金を受たる隨お返しゆせむ方纒這折死さ
 わる心不快らや覺期極くいとひつ刀を合お抗て腹へ貫んと突立ると小六を吐

嗟と推方林めく。狼狽たる状やよ听ねその十両の金所以死急だと思慮浅かり。
 俺身お路費の貯裏あり然も思わぬ安同の尸骸の頭お十金を送して債も果
 させんお備りしもの疎鹵さよと憾め目四郎息を吻て否然とろりて外れ小可
 刃お伏せと死の藤白まの敵もあはれ徳れが追隊の沙汰お及ぶ。死身の後安
 べ。這も念ひ那も思ひ目今死身の一事も用放ちて往生さすあひと物の母お與
 漬りて馮心微光景お小六も只願感嘆して適ゆる死願忠義俠迷へ半世の
 博徒るり。悟れが一日の義士とせける。自殺の覺期の健氣ゆ俺親を徳
 高た大人の教化お馮るもの飲朝お道と聽れれば夕死をも可きとのひけん。孔
 子の教も外る。嗚呼天の平命を今平命を今林示る由も。備ひ送をてあわ
 苦痛を忍びて告よか。と心を屬ら勸ま目四郎をなく頭を拾て否親も
 妻子もまた身は是野中の孤木の浮世の秋お先づの。何処へとて送を死言の

葉絶てあはれども。御高の大人の御庇ふより。初ては親の恩二十年の非を知りての
 天怕た不孝の罪の。かゝる事不就て亦心係る一筋ありと恥れをさぐる。懺悔の
 為にそのせせめ笑うともいふは。然といふは小六を。差添てその何事か知りねども。
 快々告よ甚麻を。と屢問れて目四郎の心と激し眼と睜りて。益々怒りて。益々怒りて。
 同せぬ。稟まき小可故郷に在り。時年十六の春。親の家へ使れて音回と
 喚。徹ま炊婢は幾遍と。宵程の腹。胎胎あり。けり。重妻時。隠し。もけれ
 ども。帯を比。より。保人の女房の訪来。折れ。折れ。七。支。發。憤。く。る。た
 休を親の慈悲を物敷のせ。金にて面と張れ。ければ。風波立。音回。中。身の
 暇と取らせり。佳而音回。泣くも。出ても。折物。蔭。小。俺。身。と。招。けて。其。次。や。妻。が
 親の上野る。新田の莊の百姓。今より後の身の。往方。親。里。へ。送。遣。ら。れて。身。を
 つ。小。ア。そ。る。べ。けれ。然。が。送。小。音。耗。り。の。妻。の。左。ま。れ。右。も。わ。れ。産。も。出。さ。ば。あ。ん。の。胤

る。親子の證據あり。及。死。二種。とも賜ね。と。ら。れ。て。有。理。と。あ。の。猛。可。は。る。を
 遣。る。死。東。西。を。這。身。の。幼。稚。か。り。時。腰。護。符。付。囊。小。附。ら。れ。る。迷。子。牌。と。黄
 銅。の。形。圓。金。の。似。く。り。一。武。藏。州。荏。原。郡。假。名。川。客。店。肝。八。之。見。子。目。四。郎
 と。鑲。着。ら。れ。し。後。々。ま。で。喪。ひ。も。せ。ぬ。あ。り。け。れ。年。十。五。六。の。比。より。夾。小。判。や。て。懐。小
 一。日。も。放。さ。さ。で。け。る。と。い。ひ。出。し。入。藻。塩。草。一。分。の。金。と。の。ろ。共。お。恥。て。立。音。回。取。せ。け。り
 是。一。期。の。生。別。れ。ゆ。く。錢。二。三。百。送。一。る。心。地。甘。い。の。後。々。ま。で。あ。の。由。も。出。さ。年。を
 経。て。今。般。小。の。親。の。恩。子。の。往。方。さ。へ。悞。れ。て。果。敢。る。死。を。今。や。う。思。心。知。と。知
 傳。ら。ち。明。て。あ。ん。身。は。痛。心。を。な。し。音。回。が。産。け。俺。胤。の。男。兒。女。子。後。知。ね。ど。も。恙。も
 る。て。成。長。ら。ば。年。十。四。五。の。頃。一。備。武。者。修。行。の。折。を。と。る。東。西。持。る。母。手。の
 不。圖。遇。ふ。と。あ。ら。ば。汝。が。父。の。任。務。と。生。告。も。知。さ。せ。あ。か。と。い。ふ。小。六。を。點。頭。て。その。父。の
 俺。と。あ。ら。ば。早。る。義。士。の。後。を。送。憾。く。あ。ら。ば。落。胤。あ。る。意。外。の。執。び



底倉小六撃半父讐
 今そろう牙をかへも危丁

大坂傳第二冊卷一

共八
早半玉上印發又



依寄傳第二冊卷一

共八
早半玉上印發又

上

き

冬田

平

小六

冬田

き

冬田

有像第

乞ひの庵下人あわんぞん人鷹鬼右衛門つら喚做なごその度母あ喚入れて飯を
 美菜又這那とる養をけが最慚愧くあひつ是忠饑と凌かる人の情の憑
 肉の回々随不任と俺身のうへを敷く那人の憐愍母の精霊不備よと餅を
 取を錢も養と稀多檀那とあまをけも亦下哺も夕飯と乞小ま折那鬼右衛
 獨ちその身け子舎招をきてあひ子那亦慕はしと凌り口説立て頑童ませ
 とて調戲れと腹立肉罵辱ゆ突倒つ脱んせ又撥抱して放さし声を立
 つ角ひ程不其頭ああける軒磔兒の二具麻糬粉の碎けり是忠駭く鬼右衛の怨地
 声と苛立て這と丐奴が大胆多入る折を覗き俺子余不憚り東西と竊入為
 るべ肉と趕れて逃ると相公あ磔と摧りハ下かき及罪戻且細めて後中を相公不
 稟上なれそ分説さあ伎倆の早繩圍を巻細めて杖をて猿鑢不銜せく這
 個板厨の内抱抗つ戸を閉たり折る他が朋輩多雜色の甲乙もあ見少もる

あれと偷見とふよる誰と憐むのら料らけける枉難小身の囚徒とより世
 人も人を恨とと申斐文縹緲物もれを音小泣くの今中も必鬼右衛の慈悲の
 直の慈悲とて只淫慾の與よりと知と餌不寄の圈套不搦れを朽す
 れが今宵更闌て慾と遂んと欲を欲然せし主君あわびて罪なきあわんぞん
 透透とぬき出て脱去くやと尋思とあ羊来信する親世立目の御名と唱て在ける程不
 その甲夜の間の御酒宴あるを庖厨拵に勤げあ人の往返の跡絶きければ毫もあ介る
 便とぬき小夜深より猛可の騷動敷き大刀立目の烈くゆえて修羅の街衢も異る
 ね俺身も俱不殺さる飲と胸の三真にて活る心地せり小事果て却金瘡人と
 思ひ這人さあの讖悔話説の洩せりより亡母親あは送されをともあひ合ら哀
 ち憶ま泣声を仍り這人さあ假名川を目四郎刀袷でまはさ俺身の実父あべ
 證據の方纒られエマ那腰着の迷子牌は是と実父の記念する環會今日のありあせ

照契あせよとていぬ比母れの遞とゆひを護身囊お截りて肌膚放さぬは這里お在り是
 亦南せと遠く項お掛たる肌膚神符を披きて去り腰着牌と小六を多く受取てる燭照
 ちて左見右見の武藏州荏原郡假名川客店肝八の息子目四郎と声高お讀み且
 感且歎ひて目四郎正可お听る歎這個證據のあつたは這巡礼の少年名を庶吉と喚做は
 ぬの和主と落胤疑ひする人各告とせと喚活の声の共庶吉の金瘡人の膝と推乃差若て
 死身の俺們が等々との冤屈の咎お囚れる福還て福と取てお目お拭りぬ歎けお就て
 亦最哀れの這深瘻故の依おてすはさるる母も醫療は届ん左腹へ刃大と突立あはいで
 去く苦痛さそと推量おれて憑かぬ今般の對面遣いで過ぎは恸まぬ歎けいせと現身の
 命の限のありともる母姑且の存生て思ひ限る言まも望んぬものやよ命の喃と揺動とて
 声惜は泣はなる這回いも盡さとも張敷る限のあれ巻と更て這次の復解分ると聴か
 用卷驚奇俠客傳第二集卷之一終

